

メクツテ居ル内ニ本菌ヲ見出シ驚喜シタワケデアル。私ハ今コノ稿ヲ終ヘルニ當リ、四十年ノ間種名不明ノコノ小サナ菌ヲヨク保存シ續ケラレタ根本莞爾氏ニ絶大ナル敬意ト感謝ノ意ヲ表シ、同時ニコノ標本ヲ世ニ出シ我菌類フロラニ登録出來タ事ヲ喜ブモノデアル。

(以上)

(東京科學博物館 植物學室ニ於テ)

斷 枝 片 葉 (其六十三)

牧 野 富 太 郎

TOMITARÔ MAKINO: Miscellaneous Notes on Plants LXIII.

●をかのりノ考察

をかのりハ岡海苔ノ意デアル、即チ冬葵即チふゆあふひ本名ハ葵即チあふひノ一品デ其葉ヲ焙リテ細末ニシ或ハ之レヲ燥デテ食用ニシ 其質柔軟デ粘滑恰モ海苔ノ如キ感じガスルノデ之レヲ海苔ニ見立テ其陸上ニ生エテキル故岡トシテをかのりト謂ッタモノデアル、徳川時代カラ在ルガ固ヨリ外國品デアル、飯沼慾齋ノ『草木圖説』卷ノ十二、ふゆあふひ即チ冬葵ノ條下ニ「一種葉緣皺縮波紋ヲナスアリ。コレヲヲカノリト云。葉形花葉全ク同クシテ。只葉緣ニ皺縮アルノミ。故ニ不別圖。葉ヲ焙末シテ乾苔ノ代ニ用ウルニ此種最佳ナルヲ以テ。特ニ此種ニソノ名ヲ帶ブ」ト出デ尙邇ッテ小野蘭山ノ『本草綱目啓蒙』卷ノ十二、葵即チかんあふひ一名冬あふひノ條下ニハ「……冬葵ノ生葉ヲ採焙リ末トナシ食用トナシ乾苔ニ代ベシ一種葉邊ビラツキテ平カナラザルモノアリ最可ナリ故ニ其草ヲカノリト呼」ト出テキル、岩崎灌園ノ『本草圖譜』卷ノ十四ノ葵即チかんあふひノ次ギニ「一種をかのり 形狀冬葵に似て葉の周りうねりて皺あり花實も冬葵と同じ葉を採り暴に乾し微し炮り揉て煮物へ振りかけ食へば乾苔に似たり故にをかのりと名く」トアル、白井光太郎博士ノ『植物渡來考』ニハ何故カ此をかのりがふゆあふひト共ニ載ッテキナイハドウシタモノカ同君ハ此レ位ノ事ハ無論承知ナノデアルカラ是レハ多分偶然ニ書キ落シタモノデアラ

ッ

此をかのりハ今日地方ヲ旅行シフルト偶ニ農家ナドニ一二本或ハ三四本位栽エテアルノヲ見掛ケル事ガアルガ然シ圃一面ニ作ッテアル處ハナイ、其レハ大

需用ガナイカラデアル、只物好キニ栽エテキル程度ダカラ何時モ數本位ニ止マツテキル。

私ハ數年前ニ竹中要學士ノ好意デ朝鮮デ其葉ヲ食用トシテキル冬葵ノ種子ヲ得之レヲ播種シタ澤山ニ茂ツタあふひノ苗ノ中ニ數本ノをかのりが交ッテ生エテキタノヲ見出シタ。

此冬葵即チあふひハ *Malva verticillata* L. デアル、又をかのりハ *Malva crispa* L. デアル、今ノ人々ハ此 *M. crispa* L. ヲ *M. verticillata* L. カラ離シテ一種獨立ノ種トシテキルガ是レハ LINNÉ 氏が最初ニ爲シタ如ク *M. verticillata* L. β . *crispa* L. トシタ方ガ正シイ、即チ其形體ヲ精査シテ見ルト其葉ノびらびらト皺ニナツテキル以外ニハ其花モ實モ莖モ根モ全ク同一デアルカラデアル、加之上ノ朝鮮カラノ冬葵ノ中ニ其レガ交ッテキタノハ多分其種ノ冬葵カラ變生シ來ッタモノデアラウカラ尙更此考ヘハ正シイ事デアルト私ハ信ジテキル

冬葵ガ藥用植物トシテ山城ノ郷（今ノ山城久世郡富野莊村ヲ中心トセル邊）ニ作ラレテキタノハ今カラ約ソ百年程モ前ノ事デアレバ此冬葵ガ我邦ニ入ツタハ多分其頃ナノデアラウ、其頃ハ必ズヤ其種ガ他ノ藥園ニモ作ラレテアッタデアラウ、其後種子ノ逸出シタモノガ料ラズモ海邊地ヘ走ッテ其處ニ自生安住ノ姿トナリ自ラ花サキ自ラ種子ヲ播イテ幾多ノ年月ヲ經遂ニ今日マデ其系統ヲ傳ヘ來リ今親シク其古渡ノ苗裔ヲ見得テ此植物ノ原住地ハ蓋シ海邊其處デアッタラウト考ヘ得ベキ無限ノ興味ヲ吾等ニ與ヘテキル、是レハ丁度彼ノだいこんノ故郷ガ須ラク海邊デアラネバナラナイト始テ私ノ考ヘ付キ且公ニシタ事柄ト全ク其揆ヲ一ニスル。

上ニ記シタ山城郷ノ故地ヲ私ハ昨年ト今年ト二度見舞ツタガ彼ノ藥用植物ノ一ナル天臺烏藥ガ今生籬ト成ッテ居リ又偶ニ竹林ノ縁ニ雜草ト化シタ何首鳥ガ僅カニ纏ヒ付キ昔時藥草栽培地デアッタ面影ヲ遺シテキルノハ面白イ、今日此邊デ作ラレテキル藥草ハ黃花ヲ開ク菊デアッテ其花頭ヲ乾カン斯業者ヘ出スノデアル。